

『シャーロット・ブロンテの生涯』 研究(8)

William Scruton その1

芦澤久江

1. はじめに

Brontë家の伝記研究はElizabeth C. Gaskell (1810-65)にはじまり、さまざまな人々によって語られ研究されてきたことは拙論ですでに述べてきた。初めはCharlotte (Charlotte Brontë, 1816-55)が中心に語られていたが、やがて研究はBrontë家全体に及び、さらには父親の故郷Irelandを取り上げた著書も著されるようになった。このようにCharlotteが亡くなって19世紀末までにBrontë研究はその枝葉を大きく伸ばし発展してきたのである。

小論で取り上げるWilliam Scruton (1840-1924) はまさに世紀の終わり、1898年に*Thornton and the Brontës* (John Dale&Co., Ltd., 1898) を出版した。ThorntonはCharlotte、Branwell (Patrick Branwell Brontë, 1817-48)、Emily (Emily Jane Brontë, 1818-48)、Anne (Anne Brontë, 1820-49)が生まれた生誕の地である。しかしThorntonは彼女たちのbirthplaceであるにもかかわらず、顧みられることはあまりない。それよりも彼女たちがその後暮らしたHaworthのほうがまるで生誕地であるかのようにクローズアップされ、Brontë詣での聖地として見做されている。

現在Thorntonには生家がほぼ昔のままで残っているが、Haworthよりも訪れる人も少なく、資料も限られている。それゆえWilliam Scrutonのこの著書は、ThorntonでのBrontë家を知るうえで貴重なものとなっているのである。

2. Thorntonの歴史

Scrutonは著書のなかでThorntonがいかなる歴史を経てきたのか、その変遷を述べている。前述したように、現在までにThornton についての研究はほとんどなされておらず、Gaskellはもとより詳細に資料を収集したJuliet BarkerでさえもThorntonに対する言及はきわめて限られている。それゆえThorntonについての歴史を知っておくことはBrontë伝記研究の基礎である。

Haworthで悪名高い人物がWilliam Grimshaw (1708-63)¹ならば、Thorntonでそれに対応する人物はRev. Joseph ThwaitesであるとScrutonは述べている²。彼は厳格なピューリタンで、45年間Thorntonで暮らした。彼は村人に少なからず影響力をもっており、人々に罪の悔悟を強要し、さまざまな道德条例を制定した。当時の教会記録によれば、多くの人々が姦通罪によって教会から破門を宣告されていた。またそのほかにも、Rev. Thwaitesが住民に信仰篤い生活を強いるために定めた幾多の条例があった。そうした条例を挙げてみると、まずビールを売ってはいけないとき（たとえ

ばウィークデイ午後10時以降、日曜日午前12時前、2時から4時、午後8時以降など）が決められていた。さらに彼は、安息日に闘鶏、ギャンブル、レースもしてはいけない、パン屋はその日の12時から2時までパンを売ってはいけないという条例も制定したのである。Scrutonはその出所を明らかにしていないが、当時の村や村人を知る人の記録として、Thorntonの人々はまじめで、人に頼らず、良心的であったが、一方で生活態度は下品で思いやりを欠けていたとも述べている。

Kipping教区で尊敬されていたRev. James Gregoryの回想録によると、彼が聖職者として赴任した初期のころ、Thorntonの人々は信仰心に篤く、ほとんどの人々に信仰は根付いていた。また教会は敬虔な信者でいっぱいとなり、礼拝は人々の主な喜びでさえあったと記録されている。

ScrutonはこのRev. James Gregoryの記録と、Elizabeth Gaskellが描いたYorkshire lifeの描写とは対照的だと述べている³。また*New York Times*は、Fijiの島人を除けばYorkshireの人々ほど野蛮で頑固な人たちはいないであろうと辛辣な意見を述べているが、Scrutonはこの記述に対して事実を語っていないと反論している⁴。

Thornton はかなり古い町で、さまざまな変遷を辿っている。土地台帳では‘Thornton’ではなく‘Torenton’と綴られている。町の名前の由来は一つには茂みや茨(thorn) でいっぱいだったからであるという説もある。一般的にはThorntonは侘しく、荒涼としているとされ、Haworthでさえ絵のように美しいというわけではないが、ましてやThorntonはもっとそうではないと見られている。GaskellはThorntonを‘desolate and wild, with great tracts of bleak land, enclosed by stone dykes, sweeping up to Clayton Heights’ と描写している⁵。Gaskellより数年前に*History of Bradford* を著したMr. Jamesによれば、Thorntonはほとんど特徴はなく、侘しい風景を示す一本の木があちこちにあるだけである。Branwell Brontëの伝記を書いたFrancis Leyland (1813-94) はThorntonが北斜面の谷にある美しい場所にあると述べているが、ScrutonはこのLeylandの意見を誇張しすぎであると反論している⁶。Scruton はThorntonについて村を取り囲んでいる丘や斜面は確かにわびしいが、Pinchbeckの谷は魅力的であると結論づけている⁷。

それでは次にThorntonの歴史を紐といてみたい。Mr. Jamesによれば、Thorntonは土地台帳調査の時代には、Boltonの領地であったが、その後因果関係のある一族がこの土地を取得し、地名のThorntonを一族の名前とした。Thornton家の一代目はHughで、当時はHenry II (1133-89, 在位1154-89) の時代であった。年月を経て、領地はRodger de Thorntonに引き継がれたが、男の世継ぎがいなかったため、領地は没収され、Bolling家のものとなった。Thorntonの娘ElizabethがRobert Bollingと結婚したからである。この結婚によってのちに領地はBracewellのSir Richard Tempestの所有となる。というのはTristram Bollingが1502年5月30日に亡くなり、相続したのは娘のRosamandであったが、彼女はそのときSir Richard Tempestの妻だったからである。ここで領地はThornton家、Bolling家を経て、Tempest家に渡ったのである。

このRichard TempestはThorntonが誇る重要人物であった。1513年イングランド軍がJames IV のスコットランド軍を大破した、Branxton Moor、別名Flodden Fieldの戦いで活躍した彼は‘Ballad of Flodden Field’ という詩のなかで次のように謳われている。

“The *Richard Tempest* with his rout
In rereward this th’array did hold” (Italics mine)⁸

Richard TempestはTournayの戦いでも功績が認められたため、王自身の手からKnightに叙せられ、1513年クリスマスの日にSquireからKnightになったのである。また彼は1520年Field of the Cloth of GoldでHenry VIII (1491-1547, 在位1509-47) お付きの侍者に選ばれ、王と女王がドイツの皇帝とGravelinesで面会するときに付き添っていった三人のYorkshire Knightsの一人でもあった。その後1516年には彼はYorkshireの州長官にまで昇りつめたのである。

しかし1620年になると領地はTempest家からMr. Watmoughのものとなり、さらに1638年頃Thornton近くのHeadleyのMidgley家に売却され、彼らが1715年まで所有していたようである。しかしその後Josias MidgleyはHeadleyの地所とともにThorntonの領地をBradfordの弁護士John Cockfortに譲渡し、19世紀末にはMr. Stanhopeと故Major Stocksの管財人がその所有者となったのである。

Thorntonには昔の邸宅が19世紀末にも残っていて、現在はそのほとんどが失われているが、そのなかでももっとも価値ある建物はThornton HallとLeventhorpe HallであるとScrutonは述べている⁹。Thornton HallはOld Bell Chapelに隣接しており、まちがいなくThornton家の邸宅であり、領地がさまざまな人の手に渡ってからもThornton HallにはThornton一族が住み続けていた。Leventhorpe HallはLord of Horntonの邸宅であったが、邸宅とともにLeventhorpeの私有地も結婚によってLacies家のものとなった。

PatrickがThorntonに赴任したとき、当時のメイン・ストリートにはたった23軒しか家があった。これらのほかに、School Green、Headley、West Scholes、Close Head、Leventhorpeにも集合住宅はほとんど見られなかった。Thornton住民の生活習慣は暖炉のそばで手織り物に従事していた時代からまったく異なったものとなった。しかしThorntonにはピューリタンの意識が時代を経ても根強く残っていた。というのも古い聖書の名前、たとえば‘Meshach’、‘Ezra’、‘Cain’、‘Kezia’、‘Tabita’、‘Abigail’などの名前が店の看板に見られたり、母親が呼ぶ子どもの名前のなかにそうした名前が聞こえたりするからである。

昔のThorntonの教会、すなわちOld Bell ChapelはSt. Jamesに捧げられたものである。この教会はHaworthのSt. Michael教会、Low MoorのHoly Trinity教会とともにBradford教区教会の三つの司祭出張聖堂(chapels-of-ease)の一つである。Patrickの時代にこの教会はあまり人々の関心を引くような教会ではなかった。1612年に建てられたこの教会は、改築を繰り返し原形をとどめていない(現在は残っていない)。1720年に教会内部の座席がパターンに従って改装された。そのパターンというのは南側はThornton教区の人々用であり、真ん中はAllerton、Wilsden用で、北側はThornton、Allerton、Wilsden、Clayton用となっていた。1756年にはギャラリーが北側と西の端に建設された。1793年になるとオルガン用に東の隅にもギャラリーが建設された。こうした相次ぐ改築のために、教会は狭く、暗く、じめじめしたものとなってしまったのである。二つのギャラリーが窓からの光

をほとんど遮り、信徒席の下、通路の下には墓石があった。壁には地元の名士の記念碑があったが、外の墓地にはナイトや高貴な生まれの女性の墓ではなく、労働者たちの墓ばかりである。確かに詩に謳われるような魅力もないが、それでも古い教会は風雪に耐え、何世代もの人々にとって聖地であったのである。

Thorntonの教会は前述したように司祭出張礼拝堂として建てられたが、のちに国会行政監察官より教区教会をつくるよう勧められ、十分な人数の司祭を赴任させることとなった。このときLondon組合によってBradford Manorial 管財人の一人であったJames SagerはThorntonに司祭を置くことに尽力した人物であった。彼の遺言によって財産が遺贈され、また国会行政監察からの補助金によって、司祭には年間320ポンドが支給されることとなったのである（Appendix A参照のこと）。

1655年司祭となったJoseph Dawsonは学識があり敬虔深く、愛情深い説教師であったと言われていた。Patrick以前の司祭に関してはどうであったかあまりわかっていないようであるが、職務に忠実だったと思われる。ところがPatrickがThorntonに実際赴任してみると、そこはNonconformityの全盛期であった。とくにThornton、KippingはNonconformityの重要な中心地であった。それゆえKippingで国教会に異議を唱える礼拝に参加する人々に比べると、国教徒は非常に少なかったけれども、こうした状態は人々が迫害された歴史を物語っていた。

KippingがNonconformityの中心となった原因は、ピューリタン革命期の議会、長期議会（1640年11月3日－1660年3月16日）の時代よりも前にさかのぼる。Kippingという名前はチャペルがもともと建てられた場所に由来しているが、村人は迫害に遭いその場所から追放された。Thorntonのような小さな村の多くはCharles II（1630-85、在位1660-85）の王政復古（1660）からイギリス革命（1668）まで60,000人以上の人々が宗教のために財産を奪われ、そのうちの8,000人から10,000人が牢獄のなかで死亡した。神聖化された場所というのは人々が自由を犠牲にし命をかけた場所のことである。そういう場所がまさにKippingであった。

Rev. John Rytherはたった1年しかKippingにはいなかったが、記録を残している。彼の記録によれば、1668年から1672年までKippingでの説教は公認の司祭というより訪問者と見做された説教師が行っていた。ところが1672年は記念すべき年となった。なぜならCharles IIがNonconformist迫害の手綱を緩め、あの有名な信仰寛容の宣言（‘Declaration of Indulgence’, 1672）を行ったからである。

その結果、Thomas SharpはHorton Hallの書斎を説教部屋とすることを許され、Kipping Houseとして知られているDr. Hallの家もまた礼拝所として正式に認められることになった。したがってThorntonには複雑な、そして悲しい歴史があり、このような背景を考慮すれば、Patrickが赴任したときなぜ非国教徒が多かったのか理解することができるのである。

3. Thornton赴任

Patrickが初めて聖職者として赴任した場所は、EssexのWethersfieldであった。ここでMary Burder (?1789-1866) と知り合い、将来を約束したが、結局彼らは何らかの障害によって結婚することができず、PatrickはWethersfieldを離れざるを得なかった。次に彼が向かったのはShropshireのWellington であるが、ここもまた短い赴任期間であった。1809年、彼はYorkshireのDewsburyの助任司祭となり、1811年にはHartsheadへ移った。このとき彼はMaria Branwell (1783-1821) と結婚し、この地で二人の子どもMariaとElizabethが生まれたのである。

当時の*Gentleman's Magazine*にはPatrickが親友のRev. William Morgan (1782-1858) といっしょにGuisley教会で結婚式を挙げたという告知が記載されている。Scruton はGaskellがこの‘double marriage’ (実は‘triple marriage’) には言及していないが、ここでは説明が必要であろうと述べている¹⁰。

詩人であり骨董商の故Abraham HolroydはPatrickともMorganとも親しい人物であるが、この‘double marriage’ について次のようにほのめかしている。

I have reason to believe they were satisfied with the choice they had made, and lived happily during the married state. For my part I never see why Mrs. Gaskell used the words she did about Mr. Brontë — that her marriage was ‘like throwing cold water on ice.’¹¹

このようにScrutonはHolroydの意見を引用しながら、GaskellがPatrickとMariaの結婚を氷の上に冷たい水をかけるようなものと言ったのはなぜか疑問視している。さらにScrutonはもし二人の間に愛がなければ、Mariaの死後、子どもたちは母親の実家であるPenzanceに預けられたであろうと述べている¹²。

ScrutonはPatrickの親友であるWilliam Morganについては次のように述べている。William MorganはCharlotteが結婚する際に招待状を送った人物でもあり、よく働き、彼が勤めていた教区のために犠牲を惜しまなかった。彼はBradfordのChrist Churchの最初の教会をもつ牧師(‘incumbent’)であったが、その前はCrosseのもとで助任司祭として務めていた。

Morganは説教師であると同時に作家でもあったが、Scrutonは彼の作品をまったく評価していない。彼の作品は宗教的、道徳的で力や独創性に欠けているとScrutonは評している¹³。現在でもMorganの主な作品は顧みられることはないが、彼が*The Parish Priest Portrayed*のなかでJohn Crosseの伝記を書き、*The Pastoral Visitor* (Monthly Magazine) にも寄稿し、*Christian Instructions*では説教、エッセイ、演説、逸話などを書き、*The Welsh Weaver; and A Selection of Psalms and Hymns*という物語を書いたということは事実である。しかしこれらの題名から見ても、Scrutonが指摘しているように彼の作品のすべてが宗教的なもので、魅力がないということは明らかである。

Morganは教会建設においてわずかな給料では支払うことができないほど多額の借金を背負ったが、

36年以上Bradfordに留まり続けた。彼は晩年(1851年)にHulcottの教区司祭と聖職禄を交換したものの、1858年に亡くなってしまった。

ScrutonはMorganの文学的才能は認めていなかったが、Patrickにはそうした才能が授けられていたと見做している¹⁴。Patrickの最初の作品は*Cottage Poems* (1811)であった。

Scrutonはその本のなかに書かれた幾つかの作品名(“Epistle to the Rev. J— B—”、“The Happy Cottagers”、“The Rainbow”、“Winter-night Meditations”、“Verses sent to a Lady on her Birthday”、“The Irish Cabin”、“The Cottage Maid”、“The Spider and Fly”、“The Cottager’s Hymn”)を挙げている。

1813年にはPatrickは別の作品*The Rural Minstrels*をHalifax, Mr. Holdenから出版している。ScrutonはPatrickの精神が安定し幸福であったから、このような詩が書けたのだと主張している¹⁵。私生活においてPatrickが家族とともに幸福に暮らしていたことは疑いないが、社会的に政情は不安定であった。フランス革命やナポレオン一世の戦争によってヨーロッパの平和は根底から揺り動かされていた。国内ではラダイツ暴動が起り労働者階級の人々がPatrickのような立場にいる人々を攻撃するという計画があるという不気味な噂が流れていた。*Shirley*(1849)に登場するMatthewson Helstoneのモデル、Patrickの友人Hammond Roberson(1757-1841)は超保守的な姿勢を貫き、法律遵守を強硬に主張した。Patrickも活動的で決然として、強く生気にあふれていたのも、必要な時はいつでも戦う覚悟をして、つねにピストルを携帯していた。しかしScrutonはPatrickが当時書いた詩作品から判断して、Patrickは戦いよりも幸せな洗練された生活を送ることを心から願っていたのではないかと分析している¹⁶。確かにScrutonの見解は正しいと思われる。

Patrickは苦勞してようやく聖職者の地位を得て、幸せな家庭を築いていた。それゆえ若いときのように戦いに参加する気などなかったと考えるのは当然である。ところがPatrickの願いも虚しく、Haworth転任後、子どもを残したまま妻に先立たれ、辛酸をなめることとなった。そのことが彼を変えてしまった、とScrutonは主張している¹⁷。

ScrutonはPatrickが書いた*The Cottage in the Wood*については、散文で語られているが、作者は出来事を詩的に物語っていると述べている。この作品はBradfordでよく知られた印刷屋Thomas Inkersleyから出版された。おそらくこの印刷屋は国教会信徒でトーリー党支持者でもあったのでPatrickが気に入ったのかもしれない。この印刷屋の職員の一人はPatrickが印刷された説教の校正(1824年発行)をするために工場にやってきたことを憶えていた。彼によればPatrickの娘がその校正を手伝っており、彼はその娘をCharlotteだと思ったという。しかしそのときCharlotteはまだ8歳なので、MariaかElizabethだった可能性が高い。Patrickといっしょに印刷屋にやって来た娘が誰であれ、幼い頃から父親の説教の校正を手伝っていたということはかなり早熟であったといえるであろう。

*The Cottage in the Wood*はのちに(1817年)、Inkersleyが出版したBradfordの逐次刊行物*The Cottage Magazine*に掲載され、その後Abraham HolroydがPatrickの同意を得てこの作品を再版した。

Patrickの別の作品*The Maid of Killarney*は作者の名前がなく、かつて原作者はMiss Porterとさ

れたことから、Patrickのものであるかどうかは疑わしいとScrutonは疑問を呈している¹⁸。この作品は1818年BradfordのInkesleyで印刷され、Paternoster RowのBaldwin, Cradock & Joyで出版された。Holroydはこの作品がPatrickのものであると信じ、Scruton自身はその話題についてHaworthの住人と話し合う機会があったらしい。Scrutonが話をしたHaworthの老人はこの作品はPatrickのものに間違いのないと言い、HaworthにPatrickが赴任する前から、Patrickは作家として名前を馳せていたらしい。Scrutonはこの作品が誰のものであるかについて疑問を呈しながらも、いずれにしてもPatrickにとって創作は喜びであったと結論づけている¹⁹。

ThorntonでPatrickがどのように暮らしていたかについては幾つか説が伝えられている。Abraham Holroydにある年老いた女性が次のような話をしている。PatrickがThorntonに赴任し、やがて人々から愛されるようになったが、日曜日の朝Patrickが二階の張り出し窓のところで髭をそっていたところを非国教徒が目撃したということである。この話を耳にした年老いた女性はそのようなことは本当ではないと思い、ひそかにPatrickに会いに行った。するとPatrickはこの老婆の話をすべて聞いてから、Patrickは日曜日に一度も髭をそったことはないし、誰かほかの人にそってもらったこともない。あまり髭がないので、3ヵ月に一回で十分だと話したというのである。彼はこうした噂を気にすることもなく、心広く寛大であった。結局彼の敵が仕組んだこの噂は彼の名前をいっそう高めることになった。実際PatrickがHaworthに移ることが決まったとき、非国教徒たちも彼を失ってしまうことを嘆いたほどである。

Patrickは若者のことが好きでもあった。‘The Phenomenon’ (1824) という題名の詩のなかで「若い読者へ」と呼びかけている。またThorntonでPatrickが職務についていたとき、60人の若者を連れて堅信式を施すためBradford Parish Churchにやって来た日のこと、吹雪となり若者をたくさん連れていたPatrickは心配になった。そこでTalbot Hotelの前を一行が通ったとき、Patrickはその宿屋に入って行き、Parish Churchからわたしたちが出てきたらすぐに食事ができるよう準備をしておいてほしいと頼んでいた。礼拝が終わっても雪は降り続いたため、雪がやむまでその宿でPatrickと若者は3、4時間愉しく過ごしたというエピソードが伝えられている。

前述したように、ThorntonでのPatrickの暮らしは充実していた。自由に作品を書くことに没頭することもでき、仕事の面でもBradford周辺には友人がいて楽しく勤めることができた。彼にとっての不安材料は妻の健康状態であった。妻Mariaは最初の子もMariaを生んでから急速に健康が衰えはじめ、そのうえ矢継ぎ早にElizabeth、Charlotte、Branwell、Emily、Anneを出産したことがいっそうMariaの健康を蝕んだのである。

MariaとElizabethはHartshead在任中に生まれ、MariaはWilliam Morganによって1814年4月23日洗礼を受けたが、ElizabethはThorntonに移るまで洗礼は受けていなかった。Elizabethに次いでCharlotte、Branwell、Emily、AnneもまたThorntonで洗礼を受けたのである（Appendix B参照のこと）。

Patrickは6人の子どもの世話をする乳母が必要と考え、BradfordにあるSchool of Industryを利用して、Nancy Garrsという乳母を得ることができた。彼女は子どもたちの世話を熱心にしたため

PatrickとMariaに信頼された。しばらくして、Nancyの妹Sarahが乳母となり、Nancyはより高い地位に格上げされた。彼女たちは長い間家族のために仕え、Patrickから忠実な召使であったという証明書までもらっている。

GaskellがPatrickの奇癖を論じたことはよく知られているが、Gaskellの情報源はこのGarrs姉妹からではなく、別の召使からのものであった。Gaskellが証言をとったその召使はBrontë家に仕えていたが、すぐに解雇されたのであった。したがってScrutonだけでなく、その他の伝記作家たちもまた述べているように、解雇された召使の証言は信頼に足りないものであった。

Nancy GarrsはPatrickに関してGaskellが述べたことをすべて否定している。NancyによればPatrickは穏やかな性格で、Gaskellが述べているように癩癩を起したりはしなかった。もっとも彼は世捨て人のようなところは幾分あったけれども、家族のことは愛情深く気遣い、召使にもつねに思いやり深かったという。Garrs姉妹より長い間Brontë家に仕えていたMartha Brownもまた、Patrickが知らない人の前では寡黙でぎこちなくはあったが、彼ほどやさしい人はいないと証言している。しかしMarthaの証言はGaskellによってまったく無視されている。またGaskellによって伝えられているPatrickが短気を起してピストルを撃つという話は何の証拠もない、とScrutonは反駁している²⁰。

MarthaもNancyと同様に、Patrickが子どもたちには愛情を注いでいたと証言している。MarthaはBranwellが墮落したのは父親Patrickが愛情をかけすぎたせいだと思っているくらいであるから、Patrickが子どもたちの面倒をみずに無関心であったとはいえないとScrutonは述べている。Gaskellは第三版でPatrickに関する記述を修正したが、*New York Times*ではGaskellの記述を真実としてとらえ、Patrickを‘far too tolerant of such domestic hyenas’ と酷評した。しかし*New York Times*もまた、後になってそれが真実ではなかったことを認めた。それでもPatrickの中傷は繰り返され、価値のない信頼できない情報源をもとにBrontëの伝記を書く作家が跡を絶たないということをScrutonは批判している²¹。

Patrickは彼自身への中傷についてLeylandに次のように語っている。

I did not know that I had an *enemy* in the world, much less one who would traduce me before my death, till Mrs. Gaskell's *Life of Charlotte Brontë* appeared. Everything in that book which relates to my conduct to my family is either false or distorted. I never did commit such acts as are there ascribed to me. (*Italics mine*)²²

のちのLeylandとのインタビューで、Patrickがここで述べている‘enemy’とは偽りの情報提供者のことであり、敵意を抱いた批評家のことであると弁明している。PatrickはGaskellがきつと村でのスキャンダルを耳にし、解雇された召使から情報を得ようとしたと信じていたのである。

PatrickがなぜThorntonへの赴任を決意したかという理由をScrutonは次のように説明している。Patrickより前のThorntonの前任者はThomas Atkinson (1780–1870) であった。AtkinsonがPatrick

に聖職禄を交換しようともちかけてきたとき、Patrickの頭のなかにあったのは、Thorntonに移ればBradfordにいる友人たちにより近くなるということであった²³。つまりBradfordの友人といえばMorganとFennellのことである。またPatrickにはRev. John Crosse (1739-1816) という恩人がいた。PatrickとCrosseは同じ神学派であり、親しい間柄であった。Crosseの仲間の中にはWilliam Atkinsonがおり、彼はBradfordに住み、長い間教区教会のAfternoon Lecturerを勤めていたが、その地位に彼が就くことができたのはCrosseのおかげであったのである。Atkinsonはエキセントリックなところがなかったが、稀にみるほど学識があり知的であった。彼は非国教徒に何の共感も覚えていなかったとはいえ、John Crosseと大きく異なるのは町のどの聖職者たちとも親しくしていたという点である。しかし彼が風変わりであったのは家に印刷機を備え、しばしば ‘The Old Enquirer’ という名前で教会あるいは政治的課題を書いたパンフレットを印刷していたことである。そして*The Looking Glass*のなかで、彼は非国教徒についての見解を自由に書き表していた。

いずれにしてもCrosseを中心としてPatrick、Morgan、Fennell、Atkinsonは気のあう仲間たちであったことは間違いない。Bradford Subscription Libraryにある本のなかで、Scruton はPatrick、Crosse、Morgan、Atkinsonの4人の名前を見つけていることから、おそらくこの図書館で彼らはよく集まっていたのであろう。

1815年のBradfordの教会建設は、地元の聖職者にとってかなり関心のある重要なイベントであり、そのときMorganが最初の司祭に着任したということはすでに述べた。Crosseはみんなから尊敬された教区司祭であったが、年をとりすぎ体が弱くなっていたので献堂式には参加できなかった。ただ彼は建設費用として100ポンドを献金したのである。Patrickの名前はリストになかったが、1816年7月7日新しい教会で説教を行っている。FennellはMorganが彼の娘と結婚したとき、英国国教会の聖職者ではなかったが、のちに英国国教会の聖職者となり、しばらく教区教会でCrosseのもと助任司祭を務めてから、HalifaxにあるCross-stoneの教会付きの牧師となった。彼はときどき義理の息子であるMorganを助け、1816年にCrosseが亡くなったとき*Pastoral Visitor*にCrosseの生涯を書いたのである。

ThorntonでのPatrickの仕事ぶりはほとんど知られていないが、聖職者として彼は病気の人を見舞い、慰めを与えていた。また説教師としては平易だが力強い言葉で信仰と務めについてごく単純な日課こそ大事であることを会衆に強調していた。彼の説教は簡潔そのものだが、健全な教義であった。

Patrickの神学的見解はカルビン主義というよりずっとアルミニウス主義であったとScrutonは言っている²⁴。John Wesley (1703-91) の教えはGeorge Whitefield (1714-70) の教えよりも英国国教会に限りなく影響を及ぼしていたのであった。とくにYorkshireのWest Ridingの聖職者たちはWesleyの考えを採用し、そのなかでももっとも著名だったのが、HaworthのWilliam Grimshaw、HuddesfieldのVenn、BradfordのRev. John Crosseであった。これらの人物は福音主義信仰を誇りとして、主として政治的にはTory党であり、教会と国家の統一を唱え、カトリック教を嫌い、古い頌栄を忠実に信じていた。

Patrickも福音主義であり、政治的にはTory党支持者であった。宗教人としてPatrickは尊敬を集め、評価されていたが、政治的信念としてTory党は教区民に不人気であった。Patrickは政治的な演説をして、のちに後悔することになった。というのは、Haworthで行われた1832年の選挙改正法の討論のさなか、労働者階級にも広げられることが提案されていた参政権について、与えるべきではないと主張してしまったからである。

Haworthには教養のない人々よりずっと統率力をもった貴族がいた。それはLord Mopeth Viscount (1802-64) であった。彼は選挙人の名誉を求めてその会合に出席していたが、国家の義務は大きな町にもっと教会をつくることだと述べた。彼は、田舎の教会は暗いたくさんのカンテラがか細く照らされているだけだと失言した。Patrickはその言い分に憤然として、興奮して強い口調で、精神の明かりでいっぱいなのに、暗いなどといえるであろうかと反論した。

Patrickはあまり政治には干渉しなかった。しかし彼の教区民のなかでも急進的思想の持ち主たちは彼がときどき癩癩を起こすのを許していた。福音主義を信奉するPatrickは彼の立場を大切にし、神に感謝し、Thorntonにおいて自分の務めを果たそうとしていた。その証拠としてチャペルに残された碑文にはPatrickが在職している間に、チャペルの修繕が行われ、きれいになったと記されている。Patrickの礼拝はどのようなものであったかについてScruton は村人の証言と彼自身の想像を基に、次のように述べている。HolroydはClaytonの近くの村に住んでいてPatrickを見たことがあった。Patrickはがっしりしていてハンサムであった。おそらくメイン・ストリートにある司祭館から教会へ下りて行く彼の姿はよく見られる光景だったのであろうし、彼は墓地に集まる村人に心のこもった挨拶をしたり、教会に来られなかった人を気遣ったりしていたであろうとScrutonは想像している²⁵。

Thorntonの人々は田舎者で単純だったので、礼拝も謙虚で虚飾のないものであったにちがいない。そのうえ国教会の礼拝は初期のころとその後では大きく異なっている。今では司祭や聖歌隊が行列となって進んで行くのが普通であるが、かつては司祭が聖堂番によって聖書台に案内され、聖書番が聖歌隊の指揮棒をもっていった。オルガンは西のギャラリーに置かれ、前には信徒席があり、聖歌隊の混声合唱団が讃美歌を歌っていた。特別な記念日には多くの生徒でいっぱいになった。サーブリスを着た聖歌隊はあまりにもカトリック的すぎて我慢しがたいものであった。説教壇は由緒ある三段の説教壇で、聖書台の下には教会の庶務係がおり、彼はたいてい恰幅のいい男性で、讃美歌を読誦し、お祈りの終わりに大きな声で「アーメン」と厳かに言っていた。

Patrickは1820年はじめに、Bradfordの司祭Rev. Henry Heap (1789-1839) から推薦されてHaworthへ赴任することとなった。というのはHaworthはRev. James Charnock (1761-1819) の死によって司祭の職が空席となったからである。4月20日²⁶ Patrickは家族とともに移転したが、一家は荷づくりから出発までの間はElizabeth Firthの家に滞在していた。引越しの様子を目撃していた住民がいうには、家具をいっぱい入れた8つの馬車と女性と子どもを乗せた幌つきの馬車はDenholmeに向かってThornton Heightsの坂を上っていった。彼らはFlappit SpringsやBraemoorを通ってHaworthには午後遅くに着いたのである。

4. おわりに

前述したようにBrontë研究においてThorntonの歴史を調査した資料は少ない。一方Haworthは現在でもBrontëたちが育った場所として、数多くの観光客が足を運び、イギリスで有名な観光名所となっている。しかしThorntonこそBrontë姉妹が生まれた生誕の地であり、多くの人が訪れるべき場所である。またBrontë研究においてもThorntonは彼女たちが生涯を始めた場所としてもっと研究される必要があると思われる。Scrutonの著書はわたしたちにThorntonの歴史を紐解いてくれたという点で、重要な意味をもっている。

しかしScrutonも残念ながら十分な調査をしているとはいえない。なぜなら、Brontë家が交流をもっていたFirth家についてはほとんど言及されていないからである。Firth家の娘Elizabethはいわゆる‘Thornton Journal’という日記を残しており、そこにはBrontë家との交流がわずかながらも記録されており、Brontë家の家族がどのようにThorntonで暮らしていたかが記されている。Firthの日記を詳細に調べてみれば、Brontë家の伝記にまた新たな視点が生まれてくるかもしれない。最近のさまざまな研究では著名な人々の証言や書き残したもののだけではなく、無名の人々の書きものを掘り起こすことによってその当時の社会、文化の実情などを探ろうとする動きがある。Brontë研究もまた、当時の地元の新聞や雑誌、あるいはBrontëと同時代に生きた地元の人々の記録を掘り起こしていけば、きっとBrontë研究の発展につながる新たな発見があると思われる。それゆえ実地調査、すなわち現地での資料収集が研究における重要な基盤となるであろう。

Notes

- ¹ William Grimshawは1742年から彼が亡くなる1763年までHaworthの司祭であった。Wesleyan教義にたっぷり染まり、HaworthにMethodist Chapelを建てた。ThorntonのRev. Joseph Thwaitesのように、村人を厳しい道徳律で縛り、違反した者には容赦ない罰を与えた。彼の亡骸はLuddendenの墓地に妻といっしょに葬られている。Cf. Robert Barnard and Louise Barnard, *A Brontë Encyclopedia* (Blackwell Publishing, 2007) pp.135-6.
- ² William Scruton, *Thornton and the Brontës* (Bradford, John Dale & Co., Ltd., 1898) p.3.
- ³ *Ibid.*, p.5.
- ⁴ *Ibid.*, pp.5-6.
- ⁵ Elizabeth C. Gaskell, *The Life of Charlotte Brontë*, ed., Alan Shelston (Penguin Classics, 1975) p.83.
- ⁶ Scruton, *op.cit.*, pp.6-7.
- ⁷ *Ibid.*, p.7.
- ⁸ *Ibid.*, p.8.
- ⁹ *Ibid.*, p.9.

¹⁰ *Ibid.*, p. 50.

¹¹ *Ibid.*, p. 51.

¹² *Ibid.*, p. 51.

¹³ *Ibid.*, p. 52.

¹⁴ *Ibid.*, p. 53.

¹⁵ *Ibid.*, p. 54.

¹⁶ *Ibid.*, p. 55.

¹⁷ *Ibid.*, p. 55.

¹⁸ *Ibid.*, p. 56.

¹⁹ *Ibid.*, pp. 53–4

²⁰ *Ibid.*, p. 63.

²¹ *Ibid.*, p. 64.

²² Francis Leyland, *The Brontë Family* (London:Hurst and Blackett Publishers, 1886) p. 46.

²³ Scruton, *op.cit.*, p. 69.

²⁴ *Ibid.*, p. 74.

²⁵ *Ibid.*, p. 76.

²⁶ ScrutonはBrontë家がHaworthに移ったのは2月25日と述べているが、4月20日の誤りである。

Ibid., p. 79.

Appendix A

LIST OF PERPETUAL CURATES AND VICARS OF
THORNTON.

1655. Jeremiah Maston, "a constant and faithful minister."
Joseph Dawson, ejected in 1662.
Thomas Ferrand, minister in 1706; last signature in
the Register, 1714.
1714. Michael Baron signed the Register last in 1724.
Mr. James believed him to be a son of Benjamin
Baron, vicar of Bradford.
1724. John Finch.
1739. William Sunderland } These appear from the
1742. Joseph Haigh } Register to have been
1746. Joseph Hague } curates here.
1754. Joseph Thwaites; born at Brough, in Westmoreland,
July 13th, 1726, died February 28th, 1799, buried
on the north side of the altar at Thornton Chapel,
where there was a monument to his memory, sur-
mounted by his arms. He resided at Clayton.
1799. William Atkinson.
1801. John Ison, B.A.
1802. Joseph Wilson, B.A.
1804. Thomas Atkinson.
1815. Patrick Brontë, B.A. Resigned in 1820, and removed
to Haworth.
1820. William Bishop. Buried at Thornton Chapel, 12th
April, 1839, aged sixty-one.
1839. George Thomas, B.A. Resigned in 1851.
1851. Henry Woodward. Resigned in 1855.
1855. Richard Henry Heap (son of the Rev. Henry Heap,
vicar of Bradford). He was the first vicar of Thorn-
ton, his predecessors being designated "minister."
1890. J. Leighton, B.A., now vicar of St. John the Evangelist,
Great Horton, Bradford.
1893. John Jolly, M.A., the present vicar of Thornton.

c

William Scruton, *Thornton and the Brontës* (John Dale & Co., Ltd., 1898) p. 17.

Appendix B

BAPTISMS SOLEMNIZED IN THE PARISH OF BRADFORD AND CHAPELRY OF THORNTON, IN THE COUNTY OF YORK.

When Baptized.	Child's Christian Name.	Parents' Name.		Abode.	Quality, Trade, or Profession.	By whom the ceremony was performed.
		Christian.	Surname.			
1815. August 26th	Elizabeth, daughter of	The Rev. Patrick and Maria	Brontë,	Thornton,	Minister, of Thornton.	Jno. Fennell, Officiating Minister.
1816. 29th June.	Charlotte, daughter of	The Rev. Patrick and Maria	Brontë,	Thornton,	Minister of Thornton.	Wm. Morgan, Minister of Christ Church, Bradford.
1817. July 23rd.	Patrick Branwell, son of	Patrick and Maria	Brontë,	Thornton,	Minister.	Jno. Fennell, Officiating Minister.
1818. 20th August.	Emily Jane, daughter of	The Rev. Patrick and Maria	Brontë, A. B.	Thornton Parsonage,	Minister of Thornton.	Wm. Morgan, Minister of Christ Church, Bradford.
1820. March 25th.	Anne, daughter of	The Rev. Patrick and Maria	Brontë,	Minister of Haworth.		Wm. Morgan, Minister of Christ Church, in Bradford.

William Scruton, *Thornton and the Brontës* (John Dale & Co., Ltd., 1898) p. 19.